

青陵

第 156 号

二〇一九年三月二十六日発行
発行者 奈良県立
橿原考古学研究所
奈良県橿原市畝傍町一番地
編集者 鈴木裕明

巢山古墳外堤北出土の船形埴輪

東 影 悠

一、巢山古墳と外堤北側の「墳丘状高まり」

巢山古墳は、奈良県北葛城郡広陵町に所在する墳丘長二二〇mをはかる古墳時代中期初頭に築造された前方後円墳である。明治時代に盗掘を受け、その際に出土した遺物が宮内庁に所蔵されており、鍬形石や車輪石などの腕輪形石製品と玉類の存在が知られている（宮内庁書陵部一九七九・一九八二）。昭和二（一九二七）年に国史跡に指定されたが、史跡指定にともなう発掘調査によって後円部に二基の竪穴式石室があることが確認された（上田一九二七）。近年は、史跡整備にともない広陵町教育委員会による墳丘および外堤内側の発掘調査がおこなわれ、前方部西側の出島状遺構では多数の形象埴輪の

設置が確認され、周濠内からは船や靴などの木製品が多数出土している（井上編二〇〇五）。

さて、本稿において取り上げる船形埴輪は、巢山古墳の外堤北側に位置する「墳丘状高まり」から出土した（東影編二〇一〇）。この「墳丘状高まり」は、巢山古墳の墳丘主軸の延長線上に位置しており、奈良県遺跡地図Web (www.pref.nara.jp/1671.htm) には「久保松塚古墳」として掲載されている（図1）。馬見丘陵公園の整備にともなって発掘調査をおこなったところ、「墳丘状高まり」の上において円筒埴輪列を確認したほか、埋葬施設として円筒棺が確認され、そのほか原位置は保つていなかったものの埴輪片が多数出土した。

目 次

巢山古墳外堤北出土の船形埴輪	
奈良県立橿原考古学研究所研究修記（下）	
平成二九年度韓国派遣報告	
海外交流	
附属博物館閉館のお知らせ	

東 影 悠	1
孫 麗 娟	5
絹 島 歩	6
編 集 部	8
編 集 部	8
編 集 部	8

埴輪には普通円筒埴輪・朝顔形埴輪・船形埴輪・家形埴輪があり、いずれも古墳時代中期初頭に位置づけられるものであった。こうしたことから、当該の「墳丘状高まり」については、巢山古墳とほぼ同時期に巢山古墳前方部正面につくられた別の古墳の可能性を発掘調査報告書において指摘した。ただし、これについては、巢山古墳が本来は二重周濠を有するもので「墳丘状高まり」はそ

の外堤にあたる、との見解もある（小栗二〇一五）。

二、船形埴輪の特徴と復元

船形埴輪は、舷側板や隔壁に直弧文が施された特徴的なものであり、全部で五五五の破片が確認された。報告書ではそれら破片を個別の実測図として掲載するとともに、「船形埴輪想定復元図」として復元図を提示したが、時間的制約のため文様構成を十分に検討することができなかった。

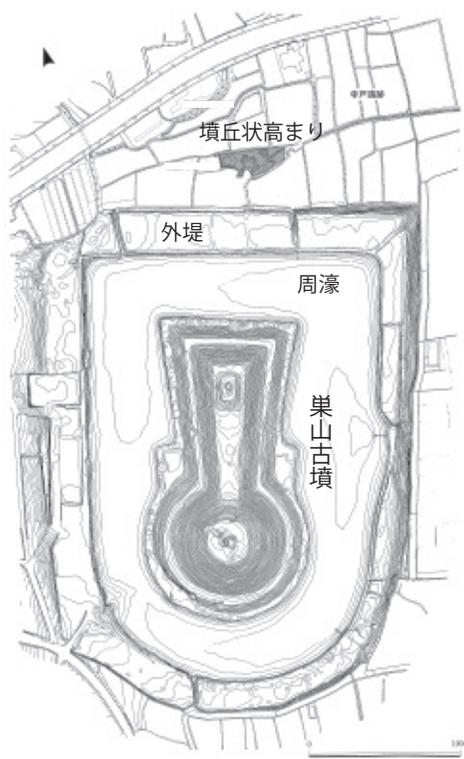


図1 巢山古墳と外堤北の墳丘状高まり

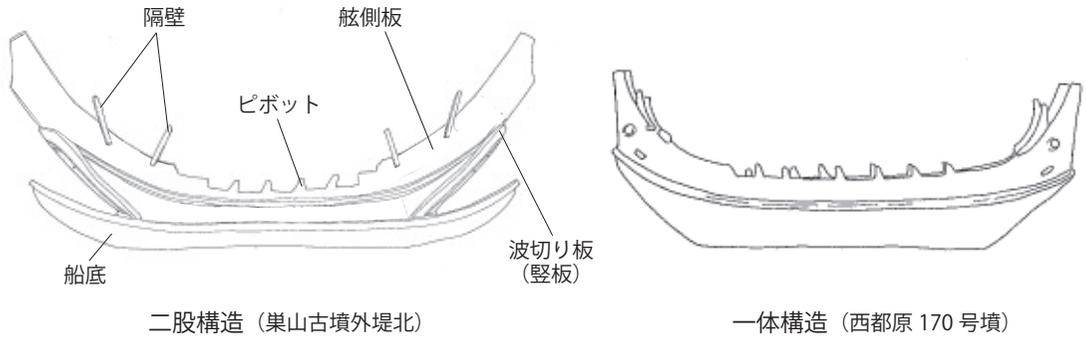


図2 船形埴輪の構造

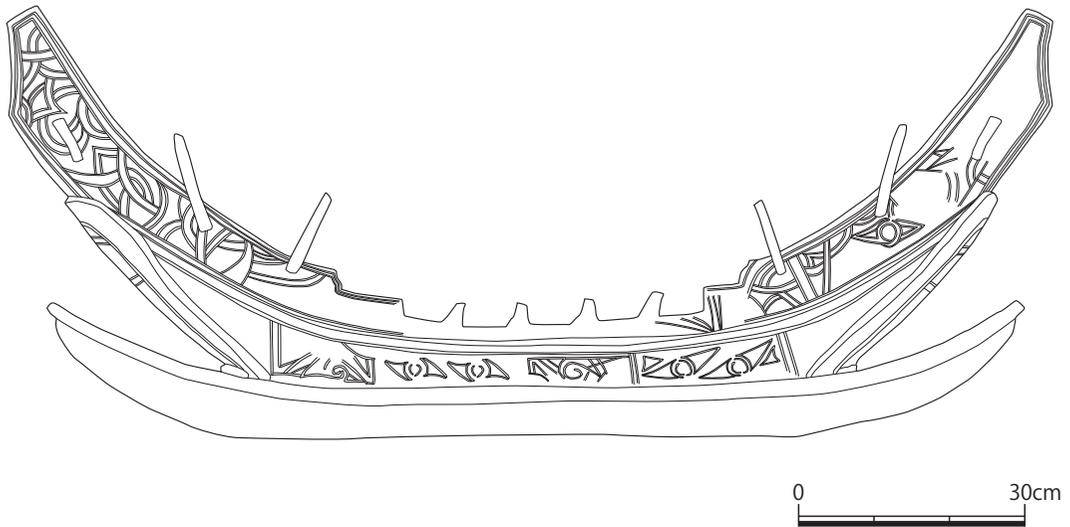


図3 栗山古墳外堤北出土船形埴輪の復元

当図の作成にあたっては、出土資料（報告書（東影編 2010 64～66 頁の図 58～60）に掲載）をもとに部位を想定して当てはめた。出土資料はいずれも小破片で接合するものが少ないことから、特に船体部分は破片の形状等からの想定による。船体部分は 2 種類の文様構成が 2 単位で繰り返されるように復元したが、左右の船体で異なる文様構成となる可能性もある。また、破片が欠損している部分については、同種の文様を有する破片から文様を補い図化している。出土資料の実際の文様については上記報告書の図を確認いただきたい。

た。そこで本稿では、船形埴輪に施された直弧文の文様構成を再度検討し、新たに復元図を提示する。

まず、船形埴輪の特徴について概要をまとめておく。いずれの破片も墳丘状高まりの円筒埴輪列周辺から出土したが、円筒埴輪列周辺の攪乱や後世の遺構内から出土したものであり、当初の設置位置は明らかではない。

この船形埴輪の最大の特徴は、舷側板や隔壁に直弧文が施されていることであり、同様の例としては大阪府河南町寛弘寺五号墳例（森一九五〇）が知られるのみである。そのほか、兵庫県赤穂市蟻無山一号墳では、直弧文ではないものの、舷側板に線刻による文様が施された破片が確認されている（赤穂市教育委員会二〇一一）。

これまでの出土例から知られる船形埴輪の構造には、舳艫と船底が分かれた形状の「二股構造」、船底と舷側板とが一体となって舳先へ向かって弓状に湾曲する「一体構造」とがある（図 2）（松坂市文化財センター二〇〇三）。これら船形埴輪はいわゆる「準構造船」を表したものであるが、その表現には個体ごとに省略等による相当の構造的な違い

表1 船形埴輪一覧

No.	府 県	市 町	遺 跡 名	埴 形	規模(m)	時期	船形埴輪出土位置	船形埴輪構造
1	茨城県	小美玉市	舟塚古墳	前方後円墳	88	後期前半	造り出し	—
2	栃木県	真岡市	鶏塚古墳	円墳	22	後期後半	?	—
3	神奈川県	横浜市	瀬戸ヶ谷古墳	前方後円墳	41	後期前半	?	—
4	長野県	飯田市	殿村遺跡	—	—	中期後半	—	二股
5	静岡県	磐田市	堂山2号墳	円墳	17.5	中期前半	周濠	二股
6	福井県	坂井市	六呂瀬山1号墳	前方後円墳	140	前期末	墳頂	—
7	三重県	松阪市	宝塚1号墳	前方後円墳	111	中期初頭	造り出し	一体
8	滋賀県	野洲市	野洲大塚山古墳	帆立貝形古墳	72	中期前半	造り出し	—
9		守山市	服部19号墳	方墳	13	中期後半	周濠	—
10		栗東市	新開4号墳	方墳	15	中期前半	?	一体
11	京都府	京丹後市	ニゴレ古墳	方墳	20	中期前半	墳頂	二股
12	大阪府	高槻市	塚廻り古墳	方墳	20	中期後半	周濠	二股
13		大阪市	長原遺跡	—	—	中期前半	—	一体
14		大阪市	長原高廻り1号墳	方墳	15	中期前半	周濠	一体
15		大阪市	長原高廻り2号墳	円墳	20	中期前半	周濠	二股
16		東大阪市	皿池古墳	方墳	—	中期前半	周濠	二股
17		八尾市	中田遺跡	円墳	33.5	前期末	周濠	二股
18		柏原市	玉手山遺跡	—	—	中期	—	—
19		藤井寺市	林遺跡	—	—	中期前半	—	一体
20		藤井寺市	土師の里遺跡	方墳	16	中期前半	?	一体
21		藤井寺市	岡ミサンザイ古墳付近	—	—	中期後半	—	二股
22		藤井寺市	岡古墳	方墳	32	中期前半	墳丘テラス	二股
23		羽曳野市	野々上遺跡	—	—	前期末	—	二股
24		羽曳野市	五手治古墳	円墳	33	中期初頭	周濠	二股
25		河南町	寛弘寺5号墳	円墳	30	中期前半	墳裾	二股
26		堺市	陶邑・伏尾遺跡	方墳	16	中期前半	周濠	—
27	高石市	大園遺跡	—	—	前期末	—	一体	
28	和泉市	菩提池西3号墳	方墳	10	前期末	周濠	二股	
29	奈良県	奈良市	鷲塚古墳	前方後円墳	103	中期前半	?	—
30		奈良市	佐紀石塚山古墳	前方後円墳	218	中期初頭	周濠	—
31		奈良市	ヒシアゲ古墳	前方後円墳	219	中期後半	?	—
32		奈良市	大和3号墳	円墳	9.3	中期後半	周濠	—
33		奈良市	法華寺付近	—	—	中期	—	一体
34		奈良市	平城宮東院南西隅	—	—	中期前半	—	一体
35		奈良市	平城宮東院	—	—	中期	—	—
36		奈良市	平城京左京2条5坊4坪	—	—	中期後半	—	—
37		天理市	南六条北ミノ遺跡	—	—	中期前半	—	—
38		大和郡山市	慈光院裏山古墳	方墳	14	中期後半	周濠	一体
39		河合町	一本松2号墳	方墳	14	中期初頭	墳丘上	一体
40		広陵町	巢山古墳外堤北	円墳	—	中期初頭	墳丘上	二股
41		桜井市	小立古墳	帆立貝形古墳	35	中期前半	造り出し	—
42		橿原市	香具山北麓遺跡(南浦出屋敷)	—	—	中期	—	二股
43		橿原市	藤原宮sx9686	—	—	中期	—	—
44		橿原市	四分遺跡	—	—	中期	—	—
45		大和高田市	池田3号墳	方墳	—	中期前半	周濠	—
46		葛城市	寺口和田1号墳	円墳	24	中期前半	墳頂	一体
47	和歌山県	和歌山市	鳴神団地古墳	—	—	後期前半	—	—
48	兵庫県	神戸市	高津橋大塚遺跡D地区	—	—	後期前半	—	—
49		朝来市	池田古墳	前方後円墳	135	中期初頭	造り出し	二股
50		赤穂市	蟻無山1号墳	帆立貝形古墳	52	中期前半	造り出し	—
51	岡山県	美咲町	月の輪古墳	円墳	60	中期前半	造り出し	二股
52	香川県	高松市	中間西井坪遺跡	—	—	前期末	—	一体
53	福岡県	朝倉市	堤当正寺古墳	前方後円墳	68	中期後半	墳頂	—
54	大分県	大分市	亀塚古墳	前方後円墳	116	中期初頭	墳丘テラス	二股
55		大分市	大在古墳	円墳	35	中期後半	?	一体
56	宮崎県	西都市	西都原169号墳	円墳	49	中期前半	突出部	一体
57		西都市	西都原170号墳	円墳	47	中期前半	墳頂	一体
58		宮崎市	下北方13号墳	前方後円墳	113	後期前半	墳頂	—

があるという（辻尾二〇一八）。

巢山古墳外堤北出土の船形埴輪は、基本的な形状は「二股構造」に復元できるが、舷側板の上端が波切り板よりも上方に突出すること、心葉形の隔壁を有することなどはこれまで知られている資料の中では「一体構造」の特徴であり、両者の特徴を兼ね備えたものと位置づけられる。

既存資料による復元では、「二股構造」は舷側板の上端と波切り板の先端が揃うこと、「一体構造」は舷側板の上端が波切り板よりも上方に突出することがそれぞれの特徴とされていたが、巢山古墳外堤北出土の船形埴輪の復元から舷側板上端と波切り板先端の形状が「二股構造」と「一体構造」とで共通していた可能性を指摘した。^(註3)

今回、巢山古墳外堤北出土の船形埴輪について、舷側板に施された直弧文の構成を再検討し、図3のように復元をおこなった。舷側板および隔壁に施された線刻は、基本的に直線と弧線によって構成される。舷側板には界線あるいは区画を示すような線刻は現状では確認できない。そのほか、二重もしくは一重の円形とその両側に突出する三角形の文様で構成される線刻が複数破片で確認

される。また、破片の形状等から舷側板と船底の間を構成する船体と考えられる破片にも線刻が施されていることが確認でき、このことから巢山古墳外堤北出土の船形埴輪は船底を除くほぼ全体に線刻による文様が施されていたとみられる。

三、船形埴輪とその出土古墳

船形埴輪は、関東地方から九州地方にかけて比較的広範囲に分布している（表1）。東北地方では今のところ出土例が知られていないことと、日本海側にはほとんど分布が認められないことを除くと、前方後円墳の分布地域とはほぼ重なる範囲に展開しているといえる。ただし、出土点数は大分府および奈良県が圧倒的に多く、それ以外の地域では数点が分布するのみであり、数的多寡の地域的傾斜は大きい。^(註4)

船形埴輪の出土した古墳の墳丘形態および規模を見てみると、大王墓級の墳丘規模二〇〇mを超える前方後円墳から、直径（あるいは一辺）一〇数mの円墳（あるいは方墳）まであり、墳丘形態あるいは規模による出土傾向の偏差はないといえる。

また、出土位置については墳頂あるいは造り出しである事例が多く、いわゆる「埴輪祭祀」の場においても

ちいられるものであった。

古墳時代前期末に畿内地域の王権中核で出現したとみられる船形埴輪は、中期に生産の盛行が認められる。畿内地域では中期のうちに生産が終了したとみられ、現状では後期に位置づけられる資料はない。しかしながら、畿内地域周縁部や関東、九州では後期に船形埴輪を有する古墳が築造されており、これら資料が王権中核の影響を受けない独自のものであったのか、あるいは現状では知られていないものの船形埴輪が王権中核でもちいられていたのか、今後の資料の増加を待つて判断する必要がある。

四、おわりに

船形埴輪は出土事例の少なさから、それを保有する古墳の性格についてさえ論じられることもある（竹原二〇〇八、中村二〇一〇など）。しかしながら、埴輪祭祀にもちいられた各種形象埴輪は、王権中核の埴輪様式という規範のもとで、各地あるいは中小古墳へ展開する過程において取捨選択がおこなわれる（東影二〇一八）。比較的通用な形象埴輪といえる盾形埴輪や蓋形埴輪でさえ古墳によっては採用されないことがあるのであって、特定種類の形象埴輪

を有するか有さないかは埴輪様式の省略化の結果を反映しているといえるのである。

そのため、船形埴輪の採用は古墳築造時の埴輪生産の中での各種形象埴輪の取捨選択の結果であり、その背景に何らかの共通性が認められる可能性ももちろん検討する必要があるものの、船形埴輪の有無のみをもって古墳の性格を論じることには慎重でなければならない。埴輪祭祀総体の中で船形埴輪がどのように位置づけられるのか、こうした検討をおこなった上で各地の古墳で船形埴輪を含めた各種形象埴輪がどのように採用されたかを探ることこそが重要と考えるが、こうした点は今後の課題としたい。

註

- (1) 複数の破片が接合して一つの破片となったものについては一点としてカウントしている。
- (2) 報告書（東影編二〇一〇）九四頁の図八二。
- (3) これまで知られていた「二股構造」の舷側板については、波切り板先端付近で欠損しているものがほとんどであり、そのため舷側板および波切り板が「一体構造」と同じ

館は新しい大型の博物館で、文化財保存に関する機器は最新のものが備わっていました。保存科学担当の方から、金属遺物・有機遺物の保存処理作業、木製品の収蔵状況、金属製品付着有機物の調査状況などについて詳細に説明を受け、意見交換を行いました。非常に多くの収穫を得ることができました（写真3）。先進機器を使用した保存処理や科学分析は際立った成果を得ることができ、高いレベルで文化財の情報や特徴を引き出せると改めて感じました。

福岡市から船に乗り、壹岐島にわ

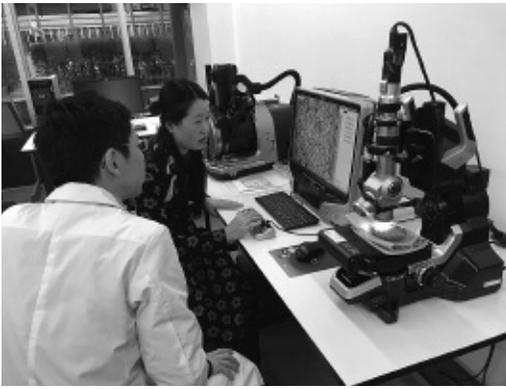


写真3 九州歴史資料館での意見交換の様子

たつて一支国博物館と長崎県埋蔵文化財センターを訪れました。壹岐島までの海原と青空のもとでの島の砂浜が美しく、私にとつて初めての島の活動は目新しく楽しいものでした。一支国博物館では、オープン収蔵庫という名のもと、高い窓ガラス越しに収蔵庫が一望でき、大変驚きました。また出土品整理作業も整理室の窓ガラス越しに見学することができ、その作業内容は動画で紹介されており、埋蔵文化財の普及の方法の一つとして、非常に印象に残りました。

長崎県埋蔵文化財センターでは、保存科学担当の方の案内で木製品保存処理室や金属製品保存処理室を見学し、木製品保存処理方法の意見交換あるいは金属製品付着有機物の観察画像を見ながら意見交換することができました。

この研修旅行を通して、日中相互で文化財保存技術や分析方法の研究を推し進めて、長く研究交流し、日中の文化財保存科学研究を共に幅広い領域で発展させていきたいと思いました。

四、おわりに

半年の研修は、私にとつて多方面で大きな収穫がありました。日本語

学習を通じて、日本文化をよく理解し、日本人の仕事、学習、生活、社会活動なども知ることができました。そして日本人のまじめな仕事態度には本当に感心させられました。

私は文化財保存科学を専門としますが、その目標は出土文化財を最大限に保存し、そこから多くの情報を引き出し、文化財の価値を示し、一般の方々にも多方面から文化財を理解していただくことです。その意味でも今回の研修は非常に得るものが多くありました。私のこの経験や得た知見は、大学の同僚と学生にも伝えていきたいと思っています。自由で多様な考え方で文化財保存科学技術を研鑽し、文化財保存科学をさらに発展させたいと思います。

平成二九年度韓国派遣報告

一、はじめに

檀原考古学研究所では平成一六年度以来、公益財団法人由良大和古代文化研究協会の協力を得て、韓国国立文化財研究所と国際交流事業として研究員の交換研修事業を行っている。平成二九年度は、私が派遣され

奈良県立檀原考古学研究所の菅谷

文則所長、豊岡卓之副所長、宮原晋一郎長、橋本裕行課長をはじめとする所員の皆様の多大なご支援に感謝いたします。鈴木裕明さん、木村理恵さん、石黒勝己さんには多方面でお世話になりました。保存科学棟の奥山誠義さん・河崎衣美さん・鍵谷純子さん・村田広美さん・河原麻衣さん・中尾直子さん・榎本恵美さんには保存科学の研修や、生活の上でのたくさんの手助けをしていただきました。

半年間の交流は、深い友情へと結実しました。この友情が末永く続くことを希望し、今後、文化財保存科学の分野でも共同調査研究ができることを希望します。

絹 島 歩

ることとなった。

私が派遣されるのは平成二六年度以来三年ぶり二回目である。前回の派遣については以前に報告を書いているので、参照頂きたい（絹島二〇一五）。韓国での滞在期間は平成三〇年一月一六日から三月一六日まで

の六〇日間である。
二、韓国到着まで

二回目の韓国派遣が決定したのは平成二九年の八月下旬である。その際、私は年末までの予定の発掘調査を担当していたため、派遣期間は年明け平成三〇年一月から三月となった。前回派遣された際は初めての海外だったこともあり不安もあったが、今回は三年前に約五ヵ月生活した大田市であり、不安は全くなかった。派遣決定から出発まで時間があり、事務的な作業は余裕をもって行うことができたが、前述のように年末まで発掘調査を担当していたこともあ



写真1 光州明花洞古墳にて

り、結局慌ただしい出発となってしまった。

初日は仁川空港まで国立文化財研究所企画画課の崔智燕さんが迎えに来てくださり、一緒に高速バスで大田市内の宿舎まで向かった。翌日から国立文化財研究所での研修がスタートした。

三、韓国での生活

国立文化財研究所では研究企画課の計らいで前回と同じ考古研究室に席を設けていただいた。考古研究室は異動が頻繁にあるため、三年前とは室員が大きく変わっていたが、前回滞在したことをよく覚えてくださったという方々もいて再び大変お世話になった。以前樞考研で研修された申ジョンウさんや金恵貞さんも考古研究室に異動されていた。また研究企画画課では空港まで迎えに来ていただいた崔智燕さんと、前回もお世話になった黄慶順さんに主にお世話になった。

宿舎は前回と同じゲストハウスで、周りの店なども全く変わっていないかった。ゲストハウスでは前回には無かったが、今回は部屋ごとにWi-Fiルータを貸し出し出してくれており、円滑にインターネットへ接続することができた。宿舎から研究所までは貸して

いただいた自転車かバスで通勤した。語学については、まず前回の報告を参照してみよう。「忠南大学の韓国語課程で約二ヶ月間、集中的に韓国語を勉強したおかげで、簡単な会話はできるようになり、またそれに伴って、韓国語を勉強するのがより楽しくなった。帰国後も勉強は続けるつもりだが、今後の成果にも期待してほしい。」(絹島二〇一五)以上

のように書いてあるが、結局一度目の研修以降、多忙を口実として自主学习がなかなか進んでおらず、今回を機に再び集中して学習しようと考えた。今回は二ヶ月という短い滞在期間であり、前回のように語学課程などに通うことはできなかったため、夜や休日を利用して、自主的に学習を行った。その危機感もあってか、集中して韓国語の学習を進めることができた。

食事について、昼食は普段研究所の食堂を利用した。考古研究室の方々と一緒に昼食をともしながら、韓国語でコミュニケーションを図った。特に考古研究室の金東勳さんは毎日昼食を共にしてもらい、天気が良い日は食後の散歩に同行させてもらった。

休日は公的な出張などが無かった

ため、以前お世話になった方を訪ねた。特に以前樞考研にも研修で滞在された国立羅州文化財研究所の田庸昊さんと李志映さんには、全羅道の遺跡を案内していただいた。また国立中原文化財研究所の韓志仙さんには旧正月休みに韓さんの親族の家で韓国の正月を体験させて頂くなど、大変お世話になり、滞在期間中に行われた平昌オリンピックにも連れて行っていただいた。

四、研究について

今回の国立文化財研究所の研修に当たっては事前に「三国時代朝鮮半島・古墳時代日本列島における古墳被葬者の職能に関する比較研究」というテーマで研究計画を立て、研修に臨んだ。これは私が最近群集墳の研究、特に群集墳に埋葬された階層の人々の生前の職能について興味を持っているからであり、朝鮮半島の同時期の古墳群の副葬品構成を比較することを考えた。滞在中に国立文化財研究所の書庫を利用していただくなどして、最新のデータを収集することができた。

また、最近刊行された黒塚古墳の報告書の中で、鉄製刺突具の項目を担当したことから、朝鮮半島三国時代の鉄製刺突具の調査を行うことを

もう一つの研究課題とした。事前に
見学したい資料のリストを国立文化
財研究所に送り、資料見学の手続き
を進めていただいた。そのお陰で、
スムーズに資料見学を行うことがで
き、希望した資料はすべて実見し、
観察することができた。韓国の鉄製
刺突具はこれまで武器として考えら
れて来たが、最近の研究では漁具と
して考えられるものもあり(金二〇
一四)、こうした研究背景の中で、日
韓の刺突具の機能について改めて考
えることができた。

さらに滞在期間中、資料調査が無
い日にも研究企画課の方々の計らい



写真2 国立文化財研究所での発表風景

で、地方の国立文化財研究所の機関
を訪問し、施設見学と挨拶を行うこ
とができた。訪問したのは国立江華
文化財研究所、国立中原文化財研究
所、国立扶餘文化財研究所、国立羅
州文化財研究所、国立加耶文化財研
究所、国立慶州文化財研究所、国立
海洋文化財研究所である。各地で施
設見学や発掘調査中の遺跡見学など
を行うことができ、ここでも以前か
らの知り合いの方に再会することが
できた。特に木浦市に所在する国立
海洋文化財研究所では、現在朝鮮通
信使船再現プロジェクトが進められ
ており、訪問当日に行われた朝鮮通
信使船の上梁式に参加するという貴
重な機会を得ることができた。

帰国前日の三月一五日には、国立
文化財研究所で研修成果を発表する
機会を得た。タイトルは「三国時代
朝鮮半島・古墳時代日本列島におけ
る古墳被葬者の職能に関する比較研
究―刺突具を中心に―」として発表
を行った。研究企画課及び考古研究
室を中心とする約二〇名の参加があ
り、多くの貴重なご質問・ご意見を
頂いた。

五、おわりに

今回の研修期間は二ヶ月という前
回よりも短い期間にも関わらず、非

常に濃密な時間を過ごすことができ
た。今回の研修で得ることができた
多くの経験を今後の業務に生かして
いきたい。

最後になりましたが、韓国での研
修期間中、国立文化財研究所研究企
画課と考古研究室の方々をはじめと
しまして、多くの方のお世話になり
ました。深くお礼申し上げます。

註

ここでいう鉄製刺突具はこれまで日本
列島では漁具として考えられてきた複数
の先端部を持つものを指しており、槍や
鉾などの刺突武器は含んでいない。これ
らの名称についての検討は黒塚古墳報告
書内の論考で行っている(絹島二〇一
八)。

参考文献

- 絹島 歩二〇一五「平成二六年度韓国派
遣報告」『青陵』第一四五号 奈良県立
橿原考古学研究所
絹島 歩二〇一八「黒塚古墳出土鉄製刺
突具の意義」『黒塚古墳の研究』八木書
店
金在弘二〇一四「三国時代の漁具の地域
性と階層性」『武器・武具と農工具・漁
具―韓日三国・古墳時代資料―』日韓
交渉の考古学―古墳時代―研究会・
国立釜山大学校博物館

海外交流

◇海外技術研修員受入(国際課事業)
受入研究員…劉斌氏
(中国陝西省西北大学文化遺産学院)

期間…平成三〇年九月二五日

〆平成三一年三月一五日

◇奈良県・陝西省戦略的専門分野交
流(国際課事業)

派遣職員…北井利幸所員

派遣先…陝西省西北大学文化遺産学
院・陝西省考古研究院

期間…平成三〇年十一月一日

〆平成三一年三月一五日

◇陝西省考古研究院からの受入
受入研究員…于春雷氏・耿慶剛氏

期間…平成三一年二月一二日

〆三月一三日

◇韓国国立文化財研究所との交換研
修
受入研究員…洪バルゲン氏

期間…平成三一年一月七日

〆三月一五日

派遣職員…岩越陽平所員

期間…平成三一年一月九日

〆三月一九日

附属博物館閉館のお知らせ

施設改修のため、平成三〇年一二
月二四日より休館しております